



みやぎ

- 2 8 号 -

発行元 独立行政法人国立病院機構 宮城病院
 発行責任者 清野 仁
 〒989-2202 宮城県亶理郡山元町高瀬字合戦原100番地
 TEL 0223-37-1131 FAX 0223-37-3316
 ホームページ <http://www.mnh.go.jp/>

●●基本理念●●

良い医療を安全に、心を込めて

大震災にも負けず

皆様のご支援に感謝申し上げます。

院長 清野 仁

東北の湘南と称されたこの山元町にも、いつもの年と同じ本格的な春が訪れた。草木は芽吹き、色とりどりの花が咲き誇る、いのち燃える春が。そして、農業や漁業を中心としたこの町には、間もなくのどかな田園風景が広がるはずであった。

しかし、3月11日(金)に発生した、未曾有の大震災は、大津波を伴って、木っ端みじんに、容赦なく、この町の日常を粉碎してしまった。多くの田畑が水没し、港も壊滅状態となった。

宮城病院のある山元町は、大津波により、国道6号線以東で、常磐線の2駅を含め、多くの家屋が流失し、人口1万7千名のうち9百名近い犠牲者を出した。

宮城病院は国道6号線に面して西側にあり、津波の難は免れたが、職員1名が亡くなり、職員のご家族、通院中の患者さんにも多数の犠牲が出た。また、地元に住居する看護師さんを中心に、約2割の職員が床上浸水、全半壊、流失などにより生活の基盤を失ってしまった。

大地震、大津波の直後、当院は、地域唯一の病院でもあり、多くの溺水者、けが人が搬送され、被災した多くの住民が押し寄せた。入院患者、勤務中の職員に幸い人的被害が無かったことから、医師をはじめ、全職員が不眠不休で対応をすることができた。通信が完全に途絶えた中で、家や家族の安否もわからぬままに、医療者としての責務を果たしてくれた全職員に心から敬服した。

大震災の後、間、髪を入れずに、国立がん研究センター、国立病院機構病院及び陸上自衛隊より災害医療チーム及び看護師チームを派遣していただいた。主導していただいた機構本部ならびに各病院、自衛隊医療チームに対し、この紙面を借りて、あらためて厚く御礼を申し上げたい。



震災発生時刻で止まったままの
 大会議室の時計
 (復興のシンボルとして保存)

震災後一ヶ月が経過し、避難されている方々も当初の半数以下となり、ライフラインの復活と併せて、少しずつ以前の落ち着きを取り戻してきた。しかし、壊滅的な打撃を受けた町の復興には相当の年月を要すると思われる。今後の町造りは単なる復旧ではなく、新しい構想の下、住民の安全を第一に、従来の地場産業の再興を視野に入れたものでなければならない。宮城病院としても、今後の町の復旧、復興に全面的に協力し、住民の健康管理のみならず、町の復興発展にも大きく寄与したいと考えている。

病院大会議室の時計は、14時46分を指して止まっている。しかし我々は1秒たりとも立ち止まることはできない。職員一丸となり、一日も早い復興をめざし、活気のある病院を取り戻していく決意である。

3月11日、14時46分大震災が発生！

各部門から寄せられた震災後の診療状況など



まずは、この度の東日本大震災後の診療において多大なるご支援をいただいた、各地の医療チームの方々に御礼申し上げます。

さて3月11日(金)14時46分にこれまで経験したことがない大地震が起きました。私は手術室にいたのですが、幸い手術が終わりに近い時点で地震が起こったので早急に閉鎖して帰室しました。その後、各部署を巡回しますと壁に亀裂が入っていたり、多くの物品が散乱していたりする状況でしたが、揺れの大きさと比べて意外と被害は少なく感じました。非常用電源でついたテレビをみると市原のコンビナート火災が放送されていましたが、まさかその後東北地方がこのような大惨事に見舞われるとは思いませんでした。

津波が来たとの連絡で、職員全員が協力し患者の搬送を行いました。その後は次々と来る救急車。多くは波にさらわれたもののどうにか逃げ切れた方々で、低体温症状を呈していました。看護部の工夫で点滴場所などを確保し、多くの医師で診療にあたりましたが、夜が明けると状況は更に困難なものとなりました。一晩野宿と同様の状態で脱水症状を起こしている患者さん、瓦礫による外傷の患者さんなど様々ですが、各科の医師が自分の専門分野を超えて診療にあたる様子はさながら野戦病院のようでした。写真は電話回線が通じないため直接来る救急車を正面玄関でトリアージしている様子です。困難な状況が続きましたが、国立がん研究センターをはじめとした診療支援チームが避難所での診察を担当してくれるようになってからは徐々に病院も余裕が出てきました。

最後になりますが、ライフラインの早期復旧にあたってくれた事務部、職員の食事を確保してくれた栄養等様々な部署の協力で困難な状況の中、通常に近いレベルで診療ができましたことを感謝いたします。

(統括診療部長 安藤 肇史)



今回の震災は、私が経験した30数年前の宮城県沖地震をはるかに上回るものでした。地震そのものより巨大津波の恐ろしさに身震いしました。当院は海にほど近い国道6号線沿いにありますが、道路を挟んで海側に少し足を踏み入れると、そこは今までと変わり果てた景色で、その状況に絶句するばかりでした。

11日の震災から困惑しつつも泊まり込みで対応する中、数日後には支援物資、さらに災害派遣チーム、門前をはじめとする調剤薬局からの協力、自衛隊や消防の支援も心強く、嬉しかったです。また、その迅速な対応に感動しました。

被災からひと月が経ち、僅かずつ落ち着きを取り戻してきたように思えました。安堵感からなのか、ようやく感謝の気持ちを言葉にすることができるようになりました。近隣被災地域の医療支援体制を作り上げてくれた長崎医療センターの中道先生はじめ、その後を引き継いでくださった九州の各チームの方々、そして関東チームや近畿チームの方々、ありがとうございました。北海道ブロックがいち早く送ってくださった支援物資には本当に助かりました。

最後に支援をしてくださった多くの皆様にこの場を借りて心から御礼申し上げます。

(薬剤科長 熊谷 芳樹)

ある日の中央病棟4階、患者様が海を見ながら「晴れると金華山が見えるんですよ。」震災直後「津波だー」の声と巨大な津波が暴風林をなぎ倒し押し寄せる光景。そして今、津波で破壊された被災地が眼前に広がる。

震災から一カ月、大きな余震が続き不安の中、無我夢中で過ごしてきた。地震直後津波に備え1階の患者様を上階に避難させたこと、病院でラジオの悲惨な情報に不安な一夜を過ごしたこと、患者食の配膳、下膳の為に階段手渡しリレー、5日間の臨時避難所対応、患者様の笑顔、元気を取り戻そうと始めた音楽療法などなど・・・

大勢の病院スタッフが自らが被災し家族、友人、家を失いながら懸命に仕事に励んでいました。当たり前のことと過ごしてきた普通の生活が大切だと思えます。多くの人達に助けられ、支えてもらい今があると感謝しています。復興に向け今の自分に出来ることを精一杯行っていこうと思います。

(作業療法士長 松浦 世志子)

地震直後からの看護師さん達のキビキビした働きに、私達は元気づけられました。事務部の采配・気配りにも助けられました。栄養・給食にも、食料調達の困難な中、職員のみで温かい食事を用意して頂いたことも有難かったです。病院全体が、本当に一つになって乗り越えてきました。外からも、たくさんの支援を頂いています。歯科診療を手伝って頂いている伊藤先生には、研究仲間にも声をかけて頂いて、ガソリンの入手が困難な中、何度も仙台と病院を往復してたくさんの物資を運んで頂いたり、避難所や被災施設を訪問して頂きました。

ベトナムの子供たちを支援する里親の会「ふえみんベトナムプロジェクト」の人達は、宅配が動き出した時から物資や義援金を送り続けてくれています。ゴールデンウィークには、災害時のボランティア経験を持つ、TFT協会の心のケアチームが来てくれます。歯科的には、早い時期から身元不明者の検視に全国から歯科医師が集まり、大学チームが避難所を巡回して応急処置を行ってくれました。

今月に入って、宮城と山形の県歯科医師会・個人医院のボランティアチーム・地元歯科医師が加わって、避難所の口腔ケアから診療室で行う本格的な治療までの流れを作り、動いています。顔を合わせていても今までは気付かなかった形の出会いや発見があり、改めて普段のお蔭様を再認識した次第です。

(歯科医長 小西 寛子)

3月11日(金)14時46分頃、私は完成間もない新病棟の2階のカンファレンス室であすなろ病棟の患者さまのご家族と面談をしておりました。大きな揺れが始まり、とっさに倒れそうになる書棚を必死に押さえていました。これでもかこれでもかというくらい大きな揺れが続きましたが、最新の耐震基準に適合する建物にいたので身の危険はないと思っていました。実際に新病棟の建物本体に大きな損傷はありませんでした。

今回の地震の深刻さを実感したのは、揺れが収まって新病棟から出てからでした。中央廊下は、防火戸が閉まり、白い埃がたちこめていました。事務室は書棚が倒れ、机も動いて書類が散乱していました。ボイラー室に行くと破れた配管から蒸気が勢いよく噴き出していました。外来管理棟は救急外来の壁に大きな亀裂が走り、建物のエキスパンション部分はことごとく外れ、防火戸が閉まらなくなったり、とにかく大変な状況で何から手をつけたら良いかわからない状態でした。直ちに職員が手分けして復旧にあたりましたが、停電、電話回線の不通、ボイラーの故障、エレベータの故障、2号井戸の揚水停止と給水管の破損、医療機器の破損、医療情報システムの停止等、ライフライン及び診療機能への深刻なダメージが判明し、さらに地域が巨大津波により壊滅的な状態になったことから、その後数週間にわたりその対応に追われました。幸いにして、当院では完全には使用できない建物はなかったことから、設備担当職員の不眠不休の作業により自家発電機を稼働し、井戸水による給水を確保して病院機能を維持してきました。

現在は震災前に近い状況で病院運営ができるようになりましたが、ここに至るまで、日頃からお付き合いいただいている業者の皆さま、山元町職員の皆さま、そして職員の皆さまには多くのご支援をいただきました。紙面を借りてあらためてお礼を申し上げます。

(企画課長 豊島 正志)



写真上：地震により蒸気管フランジが破損し、蒸気がボイラー室に充満したもの。
写真下：外来管理棟の壁が破損したもの。



この度の東日本大震災により被災された地域、皆様方に心よりお見舞い申し上げます。また、宮城病院に対し、各関係機関及び全国の皆様からたくさんの救援物資をいただきましたことに、心からお礼申し上げます。

今なお続く余震と、1ヶ月以上たった今でも毎日繰り返されるテレビ・新聞報道、毎日通勤時に目にする津波被害跡に、まだまだ震災前の落ち着きを取り戻す事が出来ない日が続いています。3月11日(金)14時46分に地震発生、震度6強の激しい揺れが長時間続き、目の前で棚が倒れ、電気器具が落下、天井の空調設備から漏水、建物にヒビが入り停電発生。いつもの「エレベータは止まってないか」「防火戸は閉まってないか」というレベルの地震では

ないと直感し、即座に院内放送にて災害対策本部の設置と、各職場の被害状況報告を事務室から呼びかけました。災害対応マニュアルとホワイトボードを引っ張り出し、地震で使用出来なくなった小会議室に変わり院長室、応接室に災害対策本部を設置し、本部員の招集と情報収集を始めました。以来、今日までたくさんの事がありすぎて、何をやってたのかと記憶をたどれない時期もあります。事務室の椅子で仮眠をとり、災害対策本部に1週間以上泊まり込み、燃料、食糧の調達に走り回り、割れたガラスを片付け、生まれて初めて玄米を食べ、一日中鳴りっぱなしの災害用衛星携帯電話の対応をし、避難所に支援物資を届けようと、無我夢中で1ヶ月近くを過ごしてきました。それでも、震災直後から一丸となって病院機能の維持に一生懸命な職員の姿に感動していました。また、職員、関係機関、取引業者並びに全国からの物資支援、医療活動支援、自衛隊からの生活支援をいただき、たくさんの方に支えていただいた事に今でも感謝の気持ちで一杯です。



被災地の復興にはまだまだ長い時間がかかりますが、1日でも早く普段通りの生活が取り戻せるよう、1歩ずつ前へ進んでいきましょう。
(経営企画室長 長澤 良相)

病院敷地の桜が今満開に咲き誇っています。未曾有の震災から1ヶ月、過酷な状況でも何事もなかったように季節は巡っています。宮城病院は昨年60床の急性期を含む4階病棟を建替え、12月に新棟へ引っ越しを行ったところでした。今年はソフト面の充実を図るべく、11月の病院機能評価Ver.6.0受審に向けてまさにスタートしたその時期に震災に遭遇しました。

震災直後はほとんどのライフラインが断たれましたが、自家発電と医療ガス、プロパンガスと井戸水による給水の中で病院機能の維持が始まりました。震災当日は1階にある3ヶ病棟155名の患者さんが新棟の中央病棟に一時避難しました。患者さんも自宅やご家族の安否を気遣いながら、不安な時間を過ごされたのではないかと思います。160名余りの地域の方々も数日間、リハビリ棟で避難生活を過ごしました。物資の供給も滞る中で入院患者の安全確保はもとより次々訪れる被災者の救急外来診療、ライフラインの復旧に全病院職員が死力を尽くしました。当院の3割近い看護職員が震災により自宅の全壊など生活基盤を失いました。また家族や親族、友人の死にも直面することになりましたが、悲しみの中でも使命感をもち仕事に全力を注いでいます。震災後まもなく国立病院機構本部が各ブロックと調整を図り、全国の機構病院から看護師派遣の体制をとっていただきました。近畿ブロックをスタートに九州、中国、四国そして北海道東北の21施設から継続した派遣の協力をいただいております。交通や通信手段の復旧に時間を要したため、看護用品や医療材料不足が危惧されましたが、各病院をはじめ多くの関係者から支援物資も提供していただき、病棟運営の維持を図ることができました。物資支援のみならず業務支援や医療活動、職員のメンタルヘルスケアに至るまで国立病院機構のネットワークと仲間の温かい励ましに支えられて、震災の1ヶ月を乗り切ることができました。皆さんからのエールに今も勇気づけられています。病院のある宮城県の山元町には現在約1400人以上が避難生活を送っています。機構医療班、地域の保健師や開業医、自衛隊医師による巡回診療と健康指導そして当院の診療状況に関する情報交換は現在も続いております。大学感染対策室からの感染管理情報も参考にしながら集団感染防止など、地域の災害医療に係る問題解決に向けて取り組んでいるところです。統一した災害ユニフォーム姿の機構職員の医療活動については地域住民からも高い評価を得ています。このような震災下における地道な地域医療への貢献は、今後の宮城病院発展の力になっていくものと思います。

今月に入ってから余震が続いており、また一方で福島原子力発電に係る放射能被害にも警戒がつつきますが、病院機能と地域の早期復興に向けて全職員の知恵と持てる力を結集して取り組んでいきたいと思っております。この度の震災にあたりご協力をいただきました皆さまに心から感謝申し上げます。
(看護部長 鴫田 民子)



ヘリ搬送



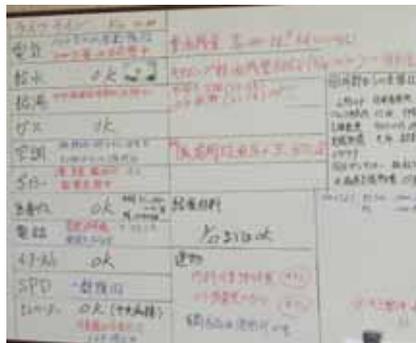
災害医療チームや自衛隊との打ち合わせ



災害対策本部



医局破損状況



避難所支援



地域の津波被害

中央病棟屋上から津波の襲来を撮影



災害派遣チームとの撮影



紹介医療機関 (3月末日現在) ご紹介ありがとうございます。

- ・松村クリニック(85件)
- ・相馬中央病院(53件)
- ・仙台厚生病院(40件)
- ・浜吉田駅前内科(38件)
- ・宮城県立がんセンター(36件)
- ・公立相馬総合病院(66件)
- ・平田外科医院(50件)
- ・南東北病院(39件)
- ・東北大学病院(38件)
- ・三浦クリニック(36件)

上位10医療機関のほか、県内外197医療機関からご紹介いただいております。

診療案内

平成23年4月1日現在

診療科別		月	火	水	木	金
内科		清野 仁	清野 仁		清野 仁	清野 仁
		志澤 聡一郎			志澤 聡一郎	
			米地 稔	米地 稔	米地 稔	米地 稔
						仙台医療センター医師
神経内科	新患	伊藤 博明	久永 欣哉	久永 欣哉	大隅 悦子	松本 有史
	再来	今井 尚志	今井 尚志	松本 有史	久永 欣哉	
		平岡 宏太良 (高次脳機能障害)	伊藤 博明		伊藤 博明	
呼吸器科			芦野 有悟			
消化器科				県立がんセンター (13:30~15:30)		
循環器科		星 信夫	星 信夫	星 信夫	星 信夫	星 信夫
アレルギー科		堀川 雅浩	大島 武子	堀川 雅浩	大島 武子	堀川 雅浩
小児科	午前	堀川 雅浩	大島 武子	堀川 雅浩	大島 武子	堀川 雅浩
	午後		小児アレルギー (堀川 雅浩)	(第1・3)乳児健診	療育相談 (大島 武子)	
整形外科						県立がんセンター (13:30~15:30)
形成外科						澤村 武 東 秀子 隔週交代 (13:30~15:30)
脳神経外科		永松 謙一	安藤 肇史	仁村 太郎	手術日	安藤 肇史
皮膚科					東北大(第4木)	
リハビリテーション科	新患				大隅 悦子 (14:00~15:00)	
	再来	齋藤 佐	齋藤 佐	齋藤 佐	齋藤 佐	齋藤 佐
放射線科(画像診断)				齋藤 美穂子		
歯科		中原 寛子	中原 寛子	中原 寛子	中原 寛子	中原 寛子
専門外来	パーキンソン病外来	伊藤 博明	久永 欣哉	久永 欣哉	大隅 悦子	松本 有史
	ALS外来			今井 尚志	今井 尚志	
	もの忘れ外来	平岡 宏太良				
	漢方外来	志澤 聡一郎			志澤 聡一郎	
	頭痛外来	伊藤 博明	久永 欣哉	久永 欣哉	大隅 悦子	松本 有史

受診される方へ

受付時間は8:30~11:00です。

土曜日・日曜日・祝日・休日及び年末年始(12月29日~1月3日)は休診です。

ただし、救急の方は随時受け付けいたします。

お問い合わせ先 0223-37-1131

初めて当院を受診される方は、他の医療機関からの紹介状をお持ちください。紹介状がなくとも受診はできますが、その場合初診時に2,625円を負担していただくこととなりますので予めご了承願います。

交通のご案内

自動車でおいでの方

仙台方面から

仙台市中心部から南へ約40km、国道4号線と6号線の分岐点から南へ約20km、国道6号線314.5kmポイント(標識)が目印です。高速道路ご利用の場合、常磐自動車道山元ICで降り、国道6号線を相馬方面へ南下。山元ICから約5km。

相馬方面から

国道6号線を仙台方面に向かい、宮城・福島県境から約10分です。

交通機関をご利用の方

仙台方面から

JR常磐線亘理駅下車、タクシーまたはJR代行バス(詳しくはお問い合わせください。)

